

芳蘭花落鳥聲悲  
松柏爲傷野水涯  
天奪妙年長夜地  
春秋其語更無期

◎哭友人

悲風颯颯滿邊城  
一夜更尋往昔盟  
既至九原空有字  
追懷惆悵泣吞聲

◎初冬閑居

采門寒色白雲重  
石徑蕭條霜露濃  
一室垂帷焚檮拙  
更長窗外水潺淙

◎冬曉早發

北風凜冽夜方長  
江上銀沙三寸強  
宿鳥一聲呼渡處  
梅放寒香路岐傍

◎冬夜泊舟

天涯渺渺四山空  
月白新磨淨碧中  
烏鵲南飛千古色  
愁人長嘯大江東

◎冬暖

暖烟輕上一冬晴  
背曝南窓樂太平  
瓶裡疎梅忽入夢  
悠悠繞舍早鶯聲

◎至日遊山寺

乘閑冬至訪隱倫  
松老山圍幽澗濱  
晷影當窓春意動  
疎梅一笑坐相親

◎雪中作

長空千里虎文班  
玉樹瑤華滿遠巒  
暮色書窓聲漸瀝  
忽驚一夜變江山

漢文

◎讀伯夷傳

研究科 竹田 みち

孟子云。伯夷聖之清者也。論二子。可謂盡矣。蓋彼二子者。孤竹君之子也。及父卒。二子相讓而不繼。其後。終逃其國。夫富貴尊榮。人之所欲也。權勢威力。亦人之所欲也。而彼二子則捨之而不顧。且其往。周也。非武王所爲。而恥食其粟。終隱首陽山。而餓死。可不謂清哉。當此時。舉天下。皆是武王所爲。而從之。而二子獨斷。然非之。餓死而不顧。非聖之清者。安能至此。歲寒然後知松柏之後凋。舉世混濁清

士乃見。孟子之論二子。可謂盡矣。

◎項羽論

秦之暴虐。至始皇而極矣。天下積憤之士。乘其釁。群起攻秦。而其能將五諸侯。血戰奮闘。以亡之者。項羽也。羽本楚人也。秦殺其君懷王。又殺其先項燕。而又殺其季父項梁。暴虐如此。則羽之亡秦者。復君父累世之深仇也。可謂忠孝一矣。唯其忠孝也。故天下豪傑。雲集響應。爭爲之用。竟以亡秦。當此時。羽奉義帝。以據關中之天險。棄霸道。以行仁義之大道。招勝國之遺臣。撫新附之黎庶。則天下皆稱其忠孝。而服其德。豈復有身死東城之禍哉。謀不出此。自矜功伐。以爲霸王。竟至弑義帝。此以忠孝而始焉。而以不忠不孝而終焉者。宜矣。其亡也。雖然。羽非有尺寸。幅起隴畝之中。數年亡暴秦。以復君父累世之深仇。亦可謂豪傑一矣。

國交

◎大化の改新

文科二部三年 小泉 郁子

神武天皇肇國の大業成りてより、年を閱することまさに一千載、世代は漸々遷移して、又簡朴なりし舊態に異なり、壺中の天地やうやうその平安はやぶられぬ。封建の國家は尾大にして掉はず、所謂族長政治は年を逐うて其の弊を加へぬ。即ちかの閔族は跋扈して路にあたり獨り勢力を恣にして、上其の朋を蔽ひ奉り、下その達をふせぎ、万乘の君主すでに直に蒼生の慈父に在りませす。民また直に天皇の赤子にあらず。あはれ無告の烝民將た安にか適歸すべき。斯く封建の弊と族長の弊と、相參差して最も荒涼なる面目をあらはせるもの、これ大化改新の以前に於ける我が國情なり。加ふるに當時一韋帶水を隔てたる支那は恰もかの唐朝にして、彼や空前の大版圖を奄有



し、に大文明を建設して東大陸に雄飛し、まさに我が國にもせまらんとする勢なり。あゝこれ正に國家危急の秋なり。我が民醒めざるか。我が民起たざるか。

如何にして、此の滅裂なる社會を整齊し、如何にして頽廢せる民心を救濟すべきか。はた誰れか濟世の英主たるべきものぞ。

先に聖明なる聖德太子ありて、すでに一度これが改革の緒を開かせたまひたりと雖も、機はまだ至らずして終に成らず。然れども偶かの法興寺の槻樹の下、飛んで鞠と共に飛揚せし一皮鞋は、實にこの空前の大改革成立の讖をなし、やがて蘇我氏は誅滅せられぬ。思ふに。蘇我氏の滅亡たるや、實に歴史的大族最後の夷滅にして、即ち族長政治の瓦解に外ならざるなり。

翻りてみるに、かの隋代に於て始めて國際關係の生じたる支那との交通は、唐代に入りて、いよゝゝ其の親交を加へ、彼の優秀なる制度典禮美術工藝等、百般の文物漸我が朝に輸入せられ、而も漸次に我民俗に同化せられぬ。ことに該

文明直接の將來者たる數多の留學歸朝者は腕を撫してこれが才能を發揮すべき期を待てり。かくの如くして大改革の機運、すでに熟しぬ。孝德天皇即位したまふや、仲大兄皇子皇儲たり。而して中臣鎌足これが輔弼に任ず。天皇皇太子と共到大槻樹の下に群臣を會し、天神地祇に誓はしめて曰く、「天は覆ひ地は載す、帝道唯一なり。而るに末代纒薄にして君臣序を失へり。皇天我に手を假し、暴逆を誅殄せり。今共に心血を瀝す、而して自今以後君に二政なく、臣に二朝なからん。此の盟に貳かば、天災し、地妖し、鬼誅し、人伐たん。皎きこと日月の如し」と。よりて始めて建元して、大化いふ。時に皇紀一千三百五年、これ實に大改新の發端たり。茲の後次を逐うて改革の業成り、終に普天の下皇土にあらざるなく、率土の濱王臣にあらざるなく絶對なる統治の大權悉く天皇に歸し、こゝに整然たる郡縣の一大國家は確立し、大陸の文明をとりて、文彩彬々たる中央政府始めてなりぬ。噫々東亞の一角燦然として文化の光に輝き、花彩

列島の實、こゝに至りてそなはれりといふべし。民は長き壓抑を脱し、鬱勃たる生氣勃然として土をもたげて萌芽し、煦々たる春風にあひて宏濶なる天地に悠々自適し、更に新しき活動に入らんとす。實に滿天下新らしき生命を賦與せられて、平和と歡喜とのうちに活躍せるもの、これ實に大化改新後の我が國情なり。

抑々かゝる未曾有の大業の、よく一兵を動かさず及に飢らすして完うせられし所以のものは實に其の改新の主旨たる、民衆の福利を重んずるにありて、其の當時の輿論に投合せしと、且

時機已に熟し万端の準備の完全せしとに由れるは更に言を待たず、なほかの對外的關係が我國民的自覺心の勃興を促したりしも亦大なる原因たらずんばあらず。然れどもなほ、かの英明果斷なる中大兄皇子と、忠誠無比なる藤原鎌足とは、實にこの大改新の中堅にして、我が國家確立の宗主として忘るべからざるものなり。實に大化の改新たるや、かの明治維新の改革と共に、我が國史を飾るべき二大事業なりといふべし。

下田にて讀侍りし

吉田 矩方

世の人はよしあしこともいはばいへ

賤が誠は神ぞ知るらん